

した。

『明治十二傑』明治三十二年六月十五日。博文館)

図画取調掛と美術学校設立準備

従来、図画取調掛は設置とともに美術学校設立の準備を開始したといわれてきた。ここでその是非を検討しておく必要があるが、同掛の場合、音楽取調掛と違って事業に関する公的記録が全く現存しておらず(明治四十四年の東京美術学校火災で焼失した可能性が大きい)、事業の実体を把握できないのが現状である。しかし、右の通説の正当性を裏付ける証左をいくつか掲げることができる。その一つは設置後間もない時期に狩野芳崖や狩野友信と一緒に藤田文蔵が雇われ、彫刻場の新築が行われていることである。この措置が彫刻の部門を含む美術学校の設立を前提としたものであることはいうまでもない。もう一つはフェノロサの「日本美術行政に関する提言」草稿(『フェノロサ資料』所収)である。この草稿は記載事項からみて明治十九年二、三月、すなわち図画取調掛発足後間もない時期の執筆と考えられ、美術局設置の促進を目的として書かれているが、その中に次のような部分がある。

〔フェノロサらの——編者註〕計画の第一部は、美術家やデザイナーのための学校教育制度であります。東京の中央美術師範学校から、完全な体系(ここで詳細に立入ることはできません)の訓練を受けた教師たちが全国の公立学校で日本画の授業

を指導するために地方へ派遣されるでしょう。才能ある若者はすぐ発見され、中央の学校においてもっと専門的な教育を受ける機会を与えられるでしょう。この案はなお幾つかの部門に分けて練られなければなりません。中央美術学校をはじめとする学校教育計画の根幹は、デザイン諸法則の実際の総合的体系であります。それらの法則は絵画、彫刻、工芸(たぶん建築も含む)の各専門学部において応用的に拡大する必要があります。やがては、見習い用の実践的仕事場をこれに関連して設立しなければなりません。商人が西洋の美術需要の特別注文を届けに来るのは、この学校の教師、高学年の学生、実践的美術家、デザイナーたちの所でしょう。この発注品は、そのような需要のためのデザインを専門に研究し、授業を主要目的とする人々の監督下に製作されるでしょう。これはすべて、農商務省ではなく、文部省の機能に属することです。実業家は、教育の必要やすぐれた芸術家の訓練のために必要な細心の注意を要する機構について無知に等しいからであります。幸いにも、「中央美術学校」のささやかな予算の形で、そのような学校制度の萌芽が暫定的ながら文部省の手で既に蒔かれました。まだ開校はしていませんが、その機構や計画は「約一行解読不能」。しかし最初十分と思われた額はその目的には少なすぎます。実際のな人々が皆その成熟を熱望する中で、この萌芽を育て、支えを与えることの重要性を認め、さらに急速に円熟に至らせる処置を講ずることは内閣の責任です。実際の外国人は皆、その開校、それが洗練と成熟を達成する方法を切望しています。

		1st year		2nd year			
School of Art Principles	Normal school teachers	elements of art form design	elements of art form design	elements of art form design	elements of art form design	Special designing will be in { Ceramics Metal working Weaving Wood(lacquer)	
		elements of expression	elements of expression	elements of expression	elements of expression		
	study of old painting	study of old painting	study of old painting	study of old painting			
	aesthetics and history of art	aesthetics and history of art	aesthetics and history of art	aesthetics and history of art			
	modelling	Literature and morals	Literature and morals	Literature and morals			
	literature and morals	Practice in teaching	Practice in teaching	Practice in teaching			
	design school	general designing	special designing workshop practice	special designing workshop practice	special designing workshop practice		
		painting	workshop practice	workshop practice	workshop practice		
		modelling	history of art	history of art	history of art		
	painting	lecture on uses					
lecture on materials							
elementary principles of architecture							
history of art							
sculpture	elements of expression	original composition	original composition	original composition			
	study of old painting	study from nature	study from nature	study from nature			
	aesthetics and history of art	anatomy	anatomy	anatomy			
	study from nature	aesthetics and history of art	aesthetics and history of art	aesthetics and history of art			
Literature and morals	elementary principles of architecture	elementary principles of architecture	elementary principles of architecture				
original composition	technique and method	technique and method	technique and method				
Literature and morals	Literature and morals	Literature and morals	Literature and morals				
like painting except this addition of painting designs for sculpture	painting designs for sculpture	painting designs for sculpture	painting designs for sculpture				
	painting designs for sculpture	painting designs for sculpture	painting designs for sculpture				

①岡倉寛三自筆カリキュラム原案（『フェノロサ資料Ⅰ』より転載）

執筆時期からみて、右文中の「学校制度の萌芽」云々の語句が図画取調掛設置を指していることはいうまでもない。フェノロサは図画取調掛の設置を「中央美術師範学校」ないし「中央美術学校」開設のための暫定的な措置と看做していたのであった。そして、開設に向けて相当具体的に計画を練っていたことをこの草稿はもの語っている。

次に、美術学校設立準備を進めるに際して岡倉やフェノロサがどのような構想を抱いていたかという点を考えてみたい。幸いなことに『フェノロサ資料Ⅰ』に関連資料が収録されているので、構想の概要が把握できる。要目を左に記すが、この構想がいつの時点で立てられたかは不明である（欧米視察後と判断されるものもある）。

一、美術学校カリキュラム

上記表①は岡倉寛三自筆カリキュラム原案である。フェノロサと協議の上作成したものであろう。基礎課程二年間と専門課程三年間の計五年間を正規の課程としている点や科目の種類および編成の点で明治二十一年制定の東京美術学校規則中のカリキュラムと形が似ている。次頁表②は両者を比較するために編者が作成した。

この原案は官立美術学校の教育法に関するフェノロサの考えを率直に表わしていることと見ることが出来る。注目すべき第一の点は基礎教育を非常に重視していることである（この点については第五章で述べる）。第二は基礎教育においてデザインを重視していることである。この場合のデザインとは、フェノロサの考えによればいわゆる純粋美術、応用美術を問わずあらゆる形式の美術の基本となる意匠計画を指す。彼はデザイン力の涵養こそが美術教育の根幹であると

言っており、この考え方がカリキュラムの上に現れているのである。第三はデザイン科の重視である。ここで言うデザインとは教科目からみてもわかるとおり工芸デザインを意味する（東京美術学校規則の上では普通科のデザインも工芸デザインも一樣に図案という語に置き替えられている）。このデザイン科が専門課程諸科の筆頭に位置づけられているのはその重要度を示しているものと思われる。フェノロサは国益増大の要である美術工芸品の海外需要の拡大は良きデザイナーの養成によって達成できるという主張を続けていたが、恐らくそうした観点からデザイン科の教育に力を入れようとしていたのであろう。このデザイン科計画は東京美術学校設置とともに図案科として形式上の実現をみるが、フェノロサ帰国後の規則改正（明治二十三年）で廃止されてしまう。代わって登場するのが美術工芸科であり、その教育は専門的伝統工芸技法の授受を中心とするものであって、フェノロサのデザイン科構想とは大きく異なっていた。

二 教育方針

教育方針に関する原案の一種とみなしうるものに「現行洋画教育の非と我々の改革案」（『フェノロサ資料』一七四頁）がある。原文はフェノロサ、岡倉以外の筆跡であるというが、内容は彼らの欧米視察後の見解であることを示している。まず、現行の洋画教育は①日本の精神と伝統に反し、②美術の原理と照らし合わせた場合、極めて劣悪であり、特に近世絵画（十六世紀—十九世紀）における「事実描写の科学的研究」に偏しており、③教育方式としては欠陥が多く、④偉大な美術家が備えているべきデザイン力の涵養と無関係のものであるから排斥すべきであるとし、次に、採るべき方針を提案

している。それは教科課程を実施する際に、(a)東洋画とか西洋画の区別をつけないこと、(b)美術の原則に基づいた完全で全く新しい教授方法をとること、(c)西洋近代の科学的方法は教科課程の中で従属的地位に置くこと、(d)画題を表現する東洋的方法を重視すること、(e)日本民族の国民的社会的理想に合致するような総合的実践をめざすこと、(f)道徳、国史、文化、高邁な理想をも教授すること、(g)裝飾美術、純粹美術の境界線を引かず、世界で初めての自由で健全なデザイン教育課程を実施することであるとす。この原案はフェノロサと岡倉の鑑画会における帰国報告講演筆記（82頁参照）と併せ読むと趣旨が一層はつきりする。

三 施設

美術学校の施設については「計画案(1)建築案」の中で(1)展示室、(2)初級生用絵画教室、(3)上級生用絵画教室、(4)用器画教室、(5)講義室、(6)教官室、(7)事務室が必要であるとし、各室の床面積や壁の高さ、用材、彩光法、設備品等を指定している。フェノロサの設計図も残っており、校舎の新築を計画していたことがわかる。なお、これに附随してより細かい室内装置や、経師屋、額縁屋、教材についても言及している。特に教材については、

「用具。紙（質の向上につき検討すること）、墨、筆（形や製法の向上）、どうさ（芳崖の改良を採用）、絵具（外国「西洋」絵具を製造するか、安価に大量輸入しなければならない）。モデリング用粘土と用具、写生用のスケッチ・ブロック、また墨、絵具、座席や傘を入れる場所のある便利なスケッチ・ボックスを用意した。」

と記されており、用具の改良に積極的姿勢を示していることや、西洋の絵具や粘土も大いに使用する計画であったことがわかる。

四 予 算

予算については「計画案(2)予算案」に第一年度総計費六万円、第二年度十万円、第三年度十五万円（以上は人件費を除いた額）と記されている。実際の東京美術学校予算（卷末経費表参照）とは比較にならない高額の予算案を立てていたことがわかる。

五 組 織

組織については断片的な記述が残っているのみで全体的な構図は把握できないが、画院ないしは美術局、アカデミーとの関連において美術学校組織をかたちづくろうとしていたと考えられる。

第二回鑑画会大会

図画取調掛が発足して美術学校設立準備が始められて間もなく、明治十九年四月十五日から十八日までの四日間、フェノロサらは第二回鑑画会大会を開催した。主な出品者は次のとおりであった。

一等賞（五十円） 狩野芳崖「二王の図」
二等賞（二十円） 橋本雅邦「弁天の図」

渡辺省亭「月夜の杉」

三等賞（十円） 欠
四等賞（五円） 高橋応真「芥子花」

その他出品者 狩野友信、端館紫川、木村立嶽、前田錦楓、瀧村弘方、狩野勝玉、三島蕉窓、本多佑輔、岡倉秋水、岡又太郎、山

内綾岡、鈴木華村等々。

前回および今回の大会の出品者の中にはのちに東京美術学校絵画科の教師となる狩野芳崖、橋本雅邦、狩野友信、結城正明や生徒となる岡倉秋水、本多佑輔（天城）、岡又太郎（不崩）らが名を連ねており、既に鑑画会において絵画科の原形のようなものができていたことがわかる。

今大会の開催は、一つには東洋絵画会の共進会に対する批判の意図も持っていた。東洋絵画会というのは龍池会から派生した団体で、この十九年春には大規模な日本画の公募展を上野公園で開催していた。会場の様子を『東洋絵画叢誌』第十六集（明治十九年六月三十日）は次のように伝えている。

館の中央を第一区とし土佐住吉光琳巨勢派の畫を陳列し其左背を第二区とし狩野英長谷川の畫を陳列し第三区ハ南宗北宗南北合派南蘋文晁等の派にして出品殊に多く殆ど場中三分の二を領せしを以て第一第二区を繞りて二區の環を畫して猶餘りあり其次を第四区とし圓山四條鈴木原望月容齋諸派の畫を陳列せり第五区ハ麥川宮川歌川派の畫を陳列し第六区ハ自ら無流派と稱せし畫を陳列し此外に審査を請ハざるの畫及京都畫學校教員生徒の畫南北（漢畫）東（圓山四條）西（洋畫）の四派の合作其他を番外として之を陳列し新畫茲に終れり其出品人ハ千六百人畫帖ハ三千貳百張なり場の最終の一部を參考畫室とす畏くも御物を殆めとし皇族方の御藏幅文部省博物館等の御備品より華族以下諸家の珍藏秘笈を出陳し一週間毎に之を掛替へ諸家の參考